

# 風土



中尊寺蓮

神蔵

器

迎火焚くたつた一人に多勢来て

僧の来る積乱雲の真下より

田水沸き稲の分蘖まつ盛り

鷗外の「キタ・セクスアリス」沙羅の花

夏瘦とひとに言はれてゐたりけり

病むほどにほほづき紅し草の中

白牡丹ひらききつたる息づかひ

涼しかり明恵上人樹上禪

かつかつと四万六千日の下駄

盆の来る一町二反塗り干して

文字摺草相模・武蔵と武相莊

蓮の花ひらくとたより中尊寺

藤原四代泰衡の首級みじしの中から出土した蓮の種から育てられ、見事に大輪の花を咲かせた貴重な蓮の花である。



# 竹間集

同人作品



花は葉に

中村 洋子

花は葉に塩の道なり小名木川  
夏の月水の匂ひの佃島  
シユレツダーへ名刺入れをり更衣  
天道虫明日の方へ飛び立ちぬ  
新聞の社説に止まる天道虫  
宇治橋のたもとに拾ふ落し文  
神の田へ一礼拝し御田植

大海原

橋添やよひ

石庭の大海原や梅雨の蝶  
石庭の石ひとつ失す涼気かな  
本殿は総竹造りほととぎす  
決断を迫られてをり花菖蒲  
虎耳草咲いて鳥獣戯画の寺  
夏草のわきて能因法師墳  
空海の山へケープル朴の花

一斗樽

南 うみを

あぢさゐのわれもわれもと湧いてきし  
かつとりの鮎がもつとも跳ねてをり  
小鮎選る指いきいきとちまちまと  
あら草に鋏弾かるる暑さかな  
夜店組む茶髪の肩の盛りあがり  
夜店組む赤子いよいよ大泣きに  
祭待つぶつ切り蛸の一斗樽

夏の月

宮川みね子

夏燕青空すこし見えてきし  
文机に和紙の便箋落し文  
方言のやさしさに会ふソーダ水  
天道虫とんで水面の暮れにけり  
梵鐘の中のくらがり梅雨寒し  
雨降嶺の雨の大粒朴の花  
波の上の波くづれゆく夏の月

硯洗ふ

浜 福恵

大潮や定家かづらの咲きのぼり  
雄島祭の往き来や草の刈られゆく  
みちのくの旅の記憶に電波の日  
廃校舎の窓に歪みて夏の雲  
沙羅散るや電子辞書より鳥の声  
睡蓮の睡りをくぐり稚魚の群  
億年の星のひかりや硯洗ふ

白あぢさゐ

山田 暢子

蛩舞ふ頃か手紙を書き始む  
看取る日の白あぢさゐの雨に濡れ  
人並に喜寿を迎へて更衣  
自転車荷台の重し夕蛙  
夏帽子風に捕られて夕河原  
父の日や天眼鏡にライト点き  
病む人に残して淡き梅雨明り

額の花

門伝史会

母の忌へ咲きつぐ雨の額の花  
蟻一匹まぎれこんだる仮住ひ  
展示さる芭蕉書簡に紙魚の跡  
でで虫や芭蕉年譜を辿りをり  
更衣背伸びせぬこと身につきて  
水馬力ゆるめば流さるる  
父の日の石で押へる楽譜かな

ポルトガル紀行

中村洋子

ミュンヘンに乗け継ぐ夜の暮遅し  
四月入るサマータイムに刻すすめ  
石一つ投げポルトガルの四月馬鹿  
テンプルやガーター騎士団亀鳴けり  
おぼろかなバスコ・ダ・ガマの廟に佇つ  
大航海時代の地図や春灯す  
豆の花帽子に飾る子供ゐて  
芽柳の枝垂れて風をつかみをり  
吹き上ぐるロカ岬への春嵐  
立ち込める夏の離宮の霞かな

# 山河集

同人作品



神蔵 器選

集落の上の上なる青田かな  
上迂 蒼人

老鶯の仕切り直しの弾む声  
尾根に出てみな大股に峰行者  
三枝祭笹百合の香の先導す  
オレンジの色なり夏の月丸し

板書してランチメニューや薦若葉  
生田 恵美子

軒 高き 四脚門や夏燕  
ほととぎす人を待つ間の文庫本  
白靴の跳んで川幅水流る  
緑陰のうしろ姿に待たれをり

朴の花天文台裏川流れ  
布施まき子

一行の二行もなくて落し文  
薔薇真紅うしろに立てる人のあり

青薦や無縁坂より上野まで  
夏の月ひとつの命おもひをり

戻り来し船の吃水初鯉  
小林 和子

五月来て鷹の続べたる裏妙義  
雲海に未だ暮れきれぬ没日かな  
大粒の雨が山女の斑を逃す  
天ぷらはたらは芽ぜんまいつくづくし

アンコール曲に手拍子梅雨に入る  
柿沼 盟子

あぢさゐや集合写真の三段目  
一斉に版元へ行く梅雨晴間  
父の日の父の葉を一種やめ  
溶岩原を巡る順路や閑古鳥

◇特別作品◇(抄)

## 古都の夏

井口ふみ緒

久方の北鎌倉や雲の峰  
「五山二位」青葉風吹く円覺寺  
水無月や「山門案内」拾ひ読み  
瑞鹿山円覺禅寺朴は実に  
涼塔頭しさや「仏日庵」の時宗公  
外国とくにの人も混じりて夏の寺  
山門を歩き交ふ雲水花桔梗  
山百合や閉ざされてをり漱石門  
安部能成眠れる墓や苔の花  
向き合つて飲むコーヒーや古都の夏



# 風土独語／神蔵器



集落の上の上なる青田かな

上辻 蒼人

人類はまず水のあることを絶対の条件として、日常の生活が出来る土地を探し求め、集まって共同の社会生活を営むようになった。

稲は日本には弥生式時代に中国・朝鮮を経て渡来し、初めは北九州・近畿地方で栽培され、その後、東海・関東から東北地方に広がり、さらに鎌倉時代には本州北端津軽地方に及び、明治以降は北海道でも栽培されるようになった。

元来、水生植物で高温多湿を好む稲は、本州各地の山の斜面に千枚田など出現し、さらに今日ではこの句のように集落の山の上方まで開拓されている。

時には白雲をうつつし、時にはさざ波をおくり、時には雨にぬれ、日に輝く。集落の上の青田。

まことに瑞穂の国の名にふさわしい。

白靴の跳んで川幅水流る

生田恵美子

西東三鬼が鶴川駅に降り立ったのは、夏もまだはじめの頃であった。三谷昭、石川桂郎とご一緒であった。三鬼は白いパナマ、服は上下そろいの白色で、靴も白色であった。

戦後の復興はようやく軌道にのって来た頃であるが、街には重

い軍靴の人を見掛けたりした時代であった。

掲出句の白靴は女性、作者自身のものである。野川の川幅は意外に広く、梅雨明けでもあり少し増水もしているようだ。久し振りに故郷の田園をおとずれると、若い時のように跳び越してみたくなった。多分、それは白靴のせいかも知れない。白靴が自分にまだある力を信じさせ、ゆめを見させる。作者は、思いきって跳んでみた。すると広いと思った川幅も、なんなく跳び越えられた。後にとうとうと梅雨明けの水が流れていた。

身八口より新しき風更衣

金井 裕子

身八口は女の和服の脇明。袖付は止まりから脇縫い止まりまでの明き、と言ってしまふと、何やらそっけない感もするが、女の子気は身八口にとどめをさす時まで言われている。私などはまだまだこぞつこ修業が足りない。

掲出句の作者は女性であるから「新しき風」で充分。さらっとして匂うような色気を感じる。

父の日やカサブランカの香が届く

杉本葉王子

カサブランカは百合の仲間と交配によって誕生したと聞く。百合の中では特別に大きく、一本に七から十以上も大輪の真白な花を咲かせる。私はこの花の名をはじめて聞いた時、アフリカもモロッコのカサブランカととり違えてしまった。

父の日は一九四〇年、母の日（一九一四）におくれること二十六年にして制定された。

私は作者のご尊父については、何も存じ上げていないが、子は父の生存時代より、むしろ父親の亡くなった年齢に作者が近づいた時、父親の本当のえらさ、すごさ、そしてなつかしさが見えて来たのではなからうか。私はカサブランカの香について言いおとしていたが、カサブランカはスペイン語で「白い家」の意という。さすれば、大きく真白い花の高く透明、素的なカサブランカの香りは父の日にふさわしい。

昼顔は妻でも母でも無き時間

岡本 尚子

妻でも母でも無い時間とは、作者に与えられた全く自由な時間である。本を読んだり、書きものをしたり、俳人であつたら句を作り、吟行に出掛けたり、そんな暇も無かつたら、ふんばつして徹夜して句を作ってみるのもたまにはよからう。暇は向うからやってくるものではなく自分で作るものである。いきなり虚を衝かれた感じであつた。同じ九月号の行人抄の、

京一步外れば幽谷朴の花 尚子

京出身の作者ならではの雄勁なる作品。青空に朴の白い花が美しい。

あぢさゐや集合写真の三段目

柿沼 盟子

作者は女優さん、この句は地方巡業の折の句で、一週間か十日の一興行が行われ、盛会に打ち上がると、俳優さん女優さんを中心に舞台関係者、表方、裏方、出入りの小者まで集まって記念の集合写真を撮るのが恒例とのこと。多い時は四十人、五十人とな

る。

「何で、三段目なの？」

「私は、背が高いから…」  
ちらりと笑われた。

一番のゴールのテープ雲の峰

小峯 綾子

マラソンの選手か、グラウンドであれば長距離の選手が、最後の力をふりしぼって、ゴールにとびこみ、両手を高くあげてテープを切る。人々は消え、喊声も消え、遠い真夏の空に切り立った鋭い雲の峰が、一瞬、眼前にはつきり見えた。

明易に卵動かす鳩の口

竹久みなみ

にわたりの卵は二十一日で孵る。鳩の卵も二十日ぐらいであろうか。卵をだいて、生まれる日の近づくと、卵の中にそれなりの動きが次第に活発になる。母鳩はそれなりの動きを敏感に察知し、くちばしで軽くたたいてみたり、卵を動かしてみたりしている。卵の殻をこわして出てくるのは生れた雛の初めての大事な仕事であるから母親としては心配でならない。

あをによし奈良の仏と天道虫

根岸 善行

十三塔の四方に仏や椎匂ふ  
風鈴や手慣れに通る針のめど

森田 節子  
山本 町子

(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

鮎のぼる比良連山は雲払ひ高槻

浅田光代

せはしなく燕出で入る築番屋

築小屋にかたむく大きカレンダー

業平の名を持つ菖蒲雨を待つ

ゆつくりと振りむく母の白日傘

梅落ちて冥きところへひびきけり

根岸善行

あをによし奈良の仏と天道虫

晴男晴女居て蜚の夜

晩年の運傾けて雷雨かな

焼酎の男ビールの女かな

朴の花遥かに蛭ヶ小島かな

森田節子

一刀に修禅寺彫や額の花

十三塔の四方に仏や椎匂ふ

「恋の橋」二つ渡るや落し文

絵草紙に夢二のをんな濃紫陽花

人混みにまぎれず僧のうす衣

金井裕子

草いきれ羽もつものを翔たしめて

軽鼻の子の離れて泳ぐこと覚え

身八口より新しき風更衣

参道の闇を点して氷店

青梅の隠るや芭蕉記念館

竹生田勝次

万世橋日傘の人と渡りけり

四階は泰山木の花の上

園丁も四阿に入る夕立かな

釘一本道にこぼるや雲の峰

明け易し妻のパジャマの細き腕

杉本葉子

朝顔に水たつぷりと妻の留守

父の日やカサブランカの香が届く

梅雨晴間回り道なるポストかな

立葵学童に席譲らるる